

大戰奉天の激闘、皆然らざるは無し。是に至つて、領事復た祝旗の掲揚如何を言はず。従ふて虚報時に露國の捷利を傳ふるも、容易に國旗を出す者なく、終局戦あらば、露國必らず敗北と假定せらるゝに至りて、此度は故意に國旗を掲げ來り、冷笑一番、露國大捷利と絶叫する等、實に滑稽を極めたり。謂ふ迄も無く一般の心中、深く貴國の勝利を祈り且つ祝し、露國の失敗を喜び且つ祝せりと。

滞在中一日露國領事ソコーフ氏を訪問す。試みに該領事の談片を記せば、『由來親交ありし日露兩國民、共に干戈を執て戰場に見ゆるに至りしは、深く遺憾とする所なりしが、幸に和親舊に復し、兩友再び握手するに至りしは同慶の至りなり。蓋し戦争は、兩國帝王の争ひにして、人民の相知る所に非らず。故に兩國の人民は、戦争の有無に關せず、互に親友たり、同胞たり。予は今舊友と一室に會談す、實に近來の快事何ものか之に過ぎん』云々。之を前日烏魯木齊領事クロトコフの談に比較せば、啻に霄壤の差のみに非ざるなり。

時代の變遷

塔爾巴哈臺は、漢代匈奴の西境にして、烏孫(今伊犁)の北境たり。北魏(四百年代)に蠕
蠕の地、周代(五百年代)に突厥、唐朝(六百年代)に西突厥と稱す。成吉思汗の十七年(千二百